

運ばれる浮舟

——女たちの移動をめぐって——

一、浮舟を連れ出す

コロナ禍における移動の制限は、あらためて我々に生きるこの意味を問う出来事でもあった。自分の意志で、自分の足で一步を踏み出すことにブレーキがかかる。それがどんなに息苦しいことであつたか。そうした意味において、平安貴族の女たちは極端に移動を制限された存在だったといえよう。『源氏物語』の女たちもまた、多くは外出しない。そもそも自らの足で歩くことがまずない。若紫が「走り来たる女子」(「若紫」一一二〇六)^(注1)として物語に登場することや、玉鬘が「徒歩」(「玉鬘」三一一〇四)で初瀬詣すること、がことさら注目されるのは、それだけ自らの足を用いることが制限されていたからなのだろう。

ここで考えたいのは、『源氏物語』「浮舟」巻、匂宮が浮舟を宇治の邸から対岸の隠れ家へと連れ出す場面である。浮舟の意志とは別

に連れ出され、川を渡るには「小さき舟」が用いられたが、舟に乗る際も、舟から下りて隠れ家へと向かう際も、浮舟は匂宮に抱かれ、運ばれていく。ここが分らない。たしかに、いわゆる嫁盗み譚の話型においてこうした事例を目にすることは出来るものの、人を抱き運ぶことの意味についてはもう一度考えてみるのもよいのではないだろうか。

「いかでか」なども言ひあへさせたまはず、かき抱きて出でたまひぬ。右近はここの後見にとどまりて、侍従をぞ奉る。いとかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと思す。有明の月澄みのほりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橋の小島」と申して、御舟しばしとどめたるを見たまへば、大きな岩のさまして、されたる常磐木の影しげれ

津つ島しま昭あき宏ひろ

(本学教授)

り。「かれ見たまへ。いとはかなけれど、千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、

年経ともかはらむものか橘の小島のさきに契る心は

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ

をりから、人のさまに、をかしくのみ、何ごとと思しなす。かの岸にさし着きて下りたまふに、人に抱かせたまはむはいと心苦しければ、抱きたまひて、助けられつつ入りたまふを、いと見苦しく、何人をかくもて騒ぎたまふらむと見たてまつる。

〔浮舟〕六―一五〇〕

光源氏の弟宮にあたる八の宮には三人の娘がいた。父の遺言を守り頑なに薫の求愛を拒む長女大君がまず一人目。次いで、その大君が亡き母の代わりとなって将来を心配し、匂宮と結ばれた次女中の君がいた。そして今回問題とする浮舟は、薫と匂宮、二人の男から愛され、ついには宇治川に身を投じる『源氏物語』最後のヒロインとしてよく知られている。川に身を投げるまでになるほど、彼女は二人の男から思いを強く寄せられており、とりわけ、匂宮が宇治川を隔てた対岸の隠れ家に浮舟を連れ出し、蕩けるような時間を共有する右の場面は有名なところであろう。

その大胆な行動は浮舟を困惑させるに十分であった。「どうしてそのような振る舞いを」、右近に制止の言葉を挟ませる余裕も与え

ず、「かき抱きて」連れ出す。宇治川を渡る小舟は、浮舟自身を投影したような存在で、川を渡るその様子は、連れ出された不安感を比喻するのみならず、彼女の人生そのものを象徴するものと読めよう。あるいは、「遙かならむ岸」とあることから、彼岸へと渡る三途の川のイメージを重ねることもできるかもしれない。^(注2)

小舟のなかにおいてさえ抱かれ続ける浮舟は、対岸に到着して下船する際にも、匂宮に抱かれたままであった。すでに指摘されるように、匂宮が浮舟を抱いて舟に乗せて運ぶ点については浮舟の思いを顧みることなく一方的になされたものと考えられるが、下船の時^(注3)まで自らの手で浮舟を抱き続けることは、「何人をかくもて騒ぎたまふらむ」と評されるように、異例の措置だったようである。

『源氏物語』における「抱く／抱かれる」という表現は四十三例見られ、うち十三例が浮舟に集中していることを指摘する橋本ゆかりは、この現象を浮舟が「他者の思惑にくるまれて生きなければならぬことを象徴する」ものだ^(注4)と論じている。有無を言わず連れ出される点も、まさしく匂宮の支配下にあることを端的に語るものであったろう。

しかし、そうした「支配する／支配される」という構図自体は認めるとして、男が女を連れ出す際に「抱く」という行為がいかなる意味をもつかについては、もう少し慎重に検討した方が良いように思われる。小柄であつても成人女性を抱きながら舟に乗せ、抱きな

がら舟から下ろすとなれば、優男のイメージがある匂宮も相応の力持ち、ということになるが、それは冗談だとしても、そもそも車や舟といった乗り物にどのように乗り下りしていたのか。

なるほど、隠れ家から離れて宇治の邸に戻る際も、「例の、抱きたまふ」（二五五）とあるから、匂宮は浮舟を抱いて運んだようだ。ただ、女は男に抱かれて乗降することが一般的な行為であったのかどうか、ひいては女たちの移動はどのように語られてきたのか、そのあたりはあまり問題にされてこなかった印象がある。本論ではあらためてこの問題を考えることを通じて、『源氏物語』最後のヒロイン、浮舟の造型を考えていきたいと思う。

二、歩行・移動・交通

自らの意志でどこかへと出向くこと。繰り返しとなるが、平安貴族の女たちほど移動を制限された者たちはいないかもしれない。移動するにあたっては、直立して自らの足を前後させることが基本となろう。^(注6)だが、そうした場面が女に認められるかというと、これはかなり少ないものと言わざるを得ない。古典語彙としての「ありく」と「あゆむ」の意味合いが異なることについてはよく知られているが、そうした語義的な意味合いを超えて、当時の人々の移動のありかたを示すのが以下の例となる。

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もと青く見えわたりたるに、上はつれなくて、草生ひしげりたるを、ながながと、たたざまに行けば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むに、走りあがりたる、いとをかし。

『枕草子』「五月ばかりなどに山里にありく」(三四六)

ここには大夫ありければ、いかに、土にや走らすらむと思ひつる人も、車に乗せ、門強うなどものしたりければ、らうがはしきこともなかりけり。

『蜻蛉日記』下巻・天禄三年三月、(二九五)

前者『枕草子』の例で「山里にありく」とされているのは、牛車での移動と考えてよいだろう。「人などの歩むに」と、従者らが徒歩で移動しているさまを「歩む」の語で表すのと対比的に読めるからだ。「草葉も水もと青く見えわたりたる」と、ビビッド目に映る光景を「をかし」と切り取るところなど、『枕草子』における感覚的な表現がよく窺えるものといえる。それだけ、外出する者と自体が非日常の感覚を刺激する鮮烈な体験となっていたのであるう。

「ありく」・「あゆむ」・「かち」等の語彙が平安時代の文学作品にどのように出てくるかを確認すると、その主体はやはり女よりも男が多く、男が主体の場合は女のもとへ向かう例などが目立つ。また、自らの足を使う、つまり徒歩で移動する例は極端に少なくなる。後

者『蜻蛉日記』の例では、隣家で火事が発生した際に、作者は養女が「土にや走らすらむ」と地面を走り逃げたかと心配しつつ、結果牛車で移動したことに安堵するものである。緊急時であっても、「土」に下りることより「車」で移動することが求められることは注目されよう。われわれが思う以上に、「土」に下りることを躊躇する、もつと言えは忌み嫌う意識があつたことを意味するのではなかつたらうか。^(注7)

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り來たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。

〔若紫〕一―二〇六

馬に乗せむとすれど、さらに聞かねば、衣の裾をとりて、立ち添ひて行く。わが沓をはかせて、みづからは、供なる人のあやしきものをはきたり。

〔浮舟〕六―一九〇

やはり、移動することや自らの足で歩くこと、それが困難であつたのが平安貴族社会の女の実態だつたようだ。したがって、その規制を破る存在が逆に注視されることとなり、『源氏物語』の若紫が「走り來たる女子」と登場してきたことは、彼女を象徴するものとなつた。^(注8) 原岡文子は「走る」若紫に「秩序に組み込まれる以前」のプリミティブな力を認めているが、その秩序のひとつに移動が抑制され

たことも含まれるのであろう。また、「浮舟」巻の例は、浮舟の侍女が勾宮の従者時方から沓を借りている場面で、いかに女が自らの足で外出しない、沓を日常的に履かないかが分かるものとなつてい

る。林悠子は、「歩かない」ことが原則である平安貴族女性が例外的に「歩く」例を集めて検討しているが、なぜ「歩かない」のか、そこには置かれた身分というものが大きく関わつていよう。^(注9) そのことを考える上で、一挙手一投足が注視されるであろう帝の移動について検討することは参考になるにちがいない。

御輿むかへたてまつる船樂、いとおもしろし。寄するを見れば、駕輿丁の、さる身のほどながら、階よりのほりて、いと苦しげにうつぶしふせる、なにのことごととなる、高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかしと見る。

〔紫式部日記〕一五三

寛弘八年六月十三日御讓位、十月十六日御即位なり。さきざきは見ねば知らず、こたみはいみじうめでたし。帝もいみじうねびととのほり、雄々しうめでたくおはします。大殿などを、なべてならすいみじうおはしますと見たてまつり思ふに、事かぎりありければ、御輿のしりに歩ませたまひたるこそ、あぢきなきことなりけれ。

〔栄花物語〕卷十「ひかげのかづら」一一四九五

帝、おりぬたまひて、またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、
ところどころ山ぶみしたまひて行ひたまひけり。……「かかる
御歩きしたまふ、いとあしきことなる」とて、内より、「少将、
中将、これかれ、さぶらへ」とて奉れたまひけれど、たがひつ
つ歩きたまふ。

（『大和物語』二段、二五三）
近くなりて歩ませたまふ。御輿ならではありかせたまはざりし
に、はげしき山を越えさせたまふ、いといとあはれに見まゐら
す。

（『榮花物語』卷四十「紫野」三—五一九）
『紫式部日記』の例は、道長の邸、土御門邸に一条天皇が行幸す
るところで、帝の乗った輿が駕輿丁に運ばれ階を登るさまが見えて
いる。その駕輿丁の苦しさに作者が自らを重ねる文脈となっている
わけだが、車ではなく輿が乗物であつて、わざわざ階段を担ぎ上
がつて輿を運ぶことで帝の聖なるありかたが可視化されることとな
る。続く『榮花物語』の例では、一条帝の讓位にともない即位した
三条天皇が輿に乗る際、徒歩で随行する道長が描かれるが、これも
序列の可視化がなされ、「あぢきなきことなりけれ」とする点からは、
帝に匹敵する道長に向ける眼差しも認められよう。

したがつて、讓位後の帝であつても徒歩で移動することはとりわ
け異例であつたがゆえに問題とされるようで、三例目の『大和物語』
には宇多法皇の山歩きが取り上げられており、ここは「山ふみ」
とあるから山を踏み固める呪性を意識したのだろうが、それでも徒

歩での移動を「あしきこと」だとする非難も受けている。最後の『榮
花物語』の例でも、高野山御幸する際には、白河院であつても参詣
の意義を考慮して徒歩で移動しているようで、それに対しては「あ
はれ」との評が与えられることとなる。

当然、歩かない、歩かせないことについては、身分が高ければ高
いほど、その規制力が強まったものと考えられようが、宇多法皇や
白河院の例がそうであるように、異例であつた徒歩による外出は宗
教的な文脈で実践されることであつたよう^{（注11）}だ。

ことさらに徒歩よりと定めたり。ならばぬ心地にいとわびしく
苦しけれど、人の言ふままにものもおぼえて歩みたまふ。「い
かなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ。わが親世に亡
くなりたまへりとも、我をあはれと思さば、おはすらむ所にさ
そひたまへ。もし世におはせば御顔見せたまへ」と仏を念じつ
つ、……
（『玉鬘』三—一〇四）

熊野へ参らむと思へども 徒歩より参れば道遠し すぐれて山
峻し 馬にて参れば苦行ならず 空より参らむ 羽賜へ若王子

（『梁塵秘抄』二五八番）

「玉鬘」巻における初瀬詣は、「ことさらに徒歩よりと定め」たも
のであつたようだ。「ならはぬ」徒歩による長距離の移動であつても、
それを選び取らせるのは、「罪深き身」以下の文脈と呼応するもの
であつたろう。四日かかつて初瀬近くの椿市に到着した際には、「生

ける心地もせで、「足の裏動かれず」〔玉鬘〕三一（一〇五）の状態であったというからよほどの苦行だったわけである。^{（注12）}それほどまでして、「徒歩」で参詣することの意義を認めていたからだと思われる。『梁塵秘抄』に歌われるごとく、苦行を自らに課することがその祈りを実現させていく根拠となっていたからこそ、あえて徒歩での移動がなされたのだと考えられよう。

しかし、輿や車といった乗り物を使わず徒歩で移動することは、それだけ自身を外部の目に晒すこととなる。よって、徒歩での移動は帝であれ女であれ最も憚られるものとなったのであろう。

その夜は、上添ひて参りたまふに、御輦車にも、立ちくだりうち歩みなど人わるかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただかく磨きたてたてまつりたまふ玉の瑕にて、わがくくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。〔藤裏葉〕三一（四五〇）

かからぬ年だに、御覧の日の童女の心地どもは、おろかならざるものを、ましていかならむなど、心もとなくゆかしきに歩みならびつつ出で来たるは、あいなく胸つぶれて、いとほしくこそあれ。〔紫式部日記〕一七八

「藤裏葉」巻の例では、明石の姫君入内の際、姫君は輦車に運ばれるかたちで移動する。一方でそれに同車せず徒歩で随行する母明石の君は、自身が他者の目に晒されることで娘の瑕となることを恐れている。女が徒歩で移動することが他者の目にさらされること、

それをひとつのイベントにまで昇華させたものに童女御覧があり、『紫式部日記』の例がそれにあたる。五節の舞姫の付き添いの童女と下仕えの女房を清涼殿に召して天皇が御覧になった儀式であったが、紫式部も「いとほし」と同情を禁じ得ないように、男たちの欲望の眼差しにさらされるものであった。^{（注13）} 女たちの徒歩での移動は本人の意向とは関係ないところで、人々の視線を集めるものであったようだ。本論で問題とする浮舟も、まさにそうした男たちの眼差しに絡め取られるひとりである。

「かの廊のつま入りつるほど、風の騒がしかりつる紛れに、簾の隙より、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、世を背きたまへるあたりに、誰ぞとさん見驚かれつる」とのたまふ。姫君の立ち出でたまへりつる後手を見たまへりけるなめり、と思ひて、ましてこまかに見せたらば、心とまりたまひなかし、……。〔手習〕六一（三〇八）

「風の吹き上げたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりと思ひつらん、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ。〔手習〕六一（三二一）

「手習」巻におけるこれらの例は、明確に「かち」「あゆむ」といった語で語られるわけではないものの、立ちながら出入りの後ろ姿が捉えられるように、自らの足を用いて歩いていたと認められよう。

屋内での移動となるが、この「手習」巻は浮舟が宇治川に身を投じて救出された後の場面である。中将が垣間見ることは、浮舟がどこまでも男たちの眼差しを呼び込んでしまう存在であることがよく分かる。

三、乗る（乗せる）／下りる（下ろす）

さて、平安時代における、特に女の徒歩での移動にまつわる問題をあらためて確認してきたわけだが、続いて乗り物を介しての移動に絞って検討していきたい。車や輿等の実態については主として歴史学の研究成果があり、さまざまな乗り物の違いは身分差に対応することなどが明らかにされている。^(注14) そのなかでもまず、一般的に用いられた牛車にどのようにして乗降するかが、通常、後ろ乗り前下りのかたちがとられている。しかしながら、具体的にどのような乗り、どのように下りるか、そのあたりは依然として不明なところも少なくない。『蜻蛉日記』の諸例を引いて考えてみよう。

やがてそこもとに、雨皮張りたる車さし寄せ、をのこどもかかるかにて、もたげたれば、はひ乗りぬめり。下簾ひきつくろひて、中門より引き出でて、さきよいほどに追はせてあるも、ねたげにぞ聞こゆる。〔『蜻蛉日記』下巻・天禄三年二月、二七四）
八日の日、未の時ばかりに、「おはしますおはします」との

のしる。中門おし開けて、車ごめ引き入るを見れば、御前のをのこども、あまた、轅につきて、簾巻きあげ、下簾左右おし挟みたり。榻持て寄りたれば、下り走りて、紅梅のただいま盛りなる下よりさし歩みたるに、似げなうもあるまじう、うちあげつつ、「あなおもしろ」と言ひつつ歩み上りぬ。

〔『蜻蛉日記』下巻・天禄三年二月、二八七）

近く車寄せて、あてなるかたに幕など引きおろして、みな降りぬ。手足もひたしたれば、ここちもの思ひはるくるやうにぞおぼゆる。

〔『蜻蛉日記』中巻・天禄元年八月、一九七）

まず、殿舎から車にどのようにに乗り込むかだが、最初の例に見られるように、「さし寄せ」とあるので、殿舎に車を連接させていたことが理解される。従者が「かるらかに」車の轅を持ち上げて殿舎と車を水平にし、そこへ「はひ乗」る兼家のすがたが見えている。殿舎から下りて車の止まっているところまで徒歩で移動し乗り込まないことで、いかに地上に足を下ろすことが避けられているかが分かる。

ただ、まったく地上に足を付けることがなかったかと言えばそうでもなさそうで、二番目の例では、従者がすかさず用意した榻をタラップにしてすばやく下りる兼家のさまが認められる。紅梅の咲き乱れる下を徒歩で移動し、殿舎に徒歩で上っている点など、比較的细节かく描写されている例だといえよう。

三つ目の例は作者が唐崎祓えに出かけた際のもので、当然琵琶湖

のほとりの唐崎に出かけるには車が用いられたわけだが、どうしたことか、ここでは作者も積極的に逢坂の関近くの走井の水に手足を浸している。「こちもの思ひはくるやうに」とあるから、下車して直に清冽な清水に手を浸したことは、兼家との関係で苦しむ日常から解き放たれる瞬間でもあったろう。まさに、移動すること、歩くことを抑制された女が、祓えという宗教的な文脈を利用しつつ、日常から解放されて車から下り、歩き、聖なる清水に触れることがいかに意味ある行為であったかが理解できるのではないだろうか。

それにしても、地上に下りること、それが避けられるのはどのような背景があつたのであろうか。やはり、そこには地上に接すること自体にある意味で禁忌となる観念が働いていたと考えて良さそう

だ。
幼き人けいめいして出でたれば、車ながら立ちてある、「御迎へになむまゐり来つるを、今日までこの穢らひあれば、え降りぬを、いづくにか車は寄すべき」と言ふに、いとものぐるほしきこちす。
〔蜻蛉日記〕中巻・天禄二年六月、一三〇

大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上りたるほどに立ち連ねたり。内外なる人の心ども、物におそはるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。……屋の上に飛ぶ車を寄せて、「いざ、かぐや姫、穢き所に、いかでか久しくおはせむ」

といふ。

〔竹取物語〕七〇

前者『蜻蛉日記』の例では、物忌中であるために車から下りられないとする兼家の発言が見られる。穢れに触れないため来訪者が着座せずに立ったまま訪問することはよく知られるが、車でも類似の対応がこうして見られるわけであり、どうやら地上に身をつけることが、穢れを伝播する働きがあつたのではないかと推測されるものである。いささか飛躍するようだが、『竹取物語』の例もそのように考え得る参考となる資料である。天人が天上世界より雲という乗り物に乗ってやってくるものの、彼らは「土より五尺ばかり上りたる」ところに立ち連ねており、土に接することはない。「飛ぶ車」も屋上に隣接するばかりで、そこには地上世界を「穢き所」とする認識が大きく関わっているものと思われる。

移動・交通手段を検討するにあたって、車に限らず船など別の乗り物の場合も考えなくてはならないが、いずれも乗り方や下り方までこだわって細かく描写することは多くない。しかし、そうしたなかでも、乗降する当人を促す他者からの行為、すなわち、乗せる、下ろすに視点を絞ってみると注目される事例が指摘できそうである。

かくて、十九日になりて、御車十二、糸毛には、宮たち、孫王、いぬ宮抱き奉りて、大輔の乳母。次々に、大人・うなぬ・下仕へ。
（おうふう『うつほ物語全』「国議・中」七二四）

大將、「乳母、抱きて下り給へ」とのたまふに、「否、宮の御やうに下りむ」とのたまひて、小さき御扇さし隠し給ひて、静かにゐざりおはする様、いとうつくしくゆゆしくおぼえ給ふ。

〔楼の上・上〕八七二

人みな、船のとまるところに、子を抱きつつ、降り乗ります。

〔土佐日記〕二月九日、五二

姫君は、何心もなく、御車に乗り込むことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて「乗りたまへ」と引くもいみじうおぼえて、……。

〔薄雲〕二一—四三三

まずは『うつほ物語』『国譲・中』巻の例だが、ここは幼少期のいぬ宮が抱かれて車に乗せられている例である。乳幼児が乳母などに抱かれて乗車・降車する例はまみえられるが、同じく『うつほ物語』『楼の上・上』巻の例では、それを拒否して自らの足で下りていくとするやや異質な例もある。ただ、『土佐日記』の例における乗船・下船の場合がそうであるように、幼き者たちを乗り物に乗降させるにあたって一般的には抱きかかえるかたちで行ったのであろう。それでも、幼き者たちを「抱く」ことが荷物を運搬するがごとくなされたものでないことは、『源氏物語』『薄雲』巻の例からも明らかだ。姫君との別れを前にして、母明石の君は抱いて姫君を車に乗せるが、「みづから」とことさら言葉が挟まれるので、本来なら乳母が担つ

たものだと理解される。要するに、乳母の手を借りずに自らの手で抱くことにこだわる意識があつたはずで、対象となる娘を齎きはぐくむ祈りがそこには介在していたのだと考えている。^(注15)

ともあれ、乗り物に乗降するに際して他者の手が介在する点について、単なる物理的な問題のみが関係するのではないことを確かめたいのだが、それを窺ううえで見過ごせない用例が以下のものとなる。

御車二十ばかり、四位・五位数知らずして、桂川に出で給ふ。榊左右にさして、「の車より御神の子下ろして、舞ひ入る。

〔うつほ物語〕「祭の使」二二七

御車寄せたる所に、院渡りたまひて、おろしたてまつりたまふなども、例には違ひたることもなり。ただ人におはすれば、よろづのこと限りありて、内裏参りにも似ず、婿の大君といはむにも事違ひて、めづらしき御仲のあはひどもになむ。

〔源氏物語〕「若菜上」四一—六二

院の渡らせたまふをば、御車かきおろして、御殿籠りたる御座ながら、殿の御前、彈正宮など兒きのせたてまつらせたまひて、やがて殿御車にはさぶらはせたまふ。かしこにも御車かきおろして、同じさまにておろしたてまつらせたまふ。

〔栄花物語〕卷七「とりべ野」一一三五—二
〔うつほ物語〕「祭の使」巻の場面は神楽を催す際のもので、「抱く」

とまではされていないものの、二十両ほどの車で貴族が移動するなか、第一の車に乗る舞姫を下車させていることが読み取れる。舞姫を「神の子」として、それを神聖視する意識が歩かせないことに、そして「一の車」に乗せていることと考えられよう。また、『源氏物語』「若菜上」巻の例は、朱雀院の女三の宮が光源氏のもとへと輿入れする場面であり、「例には違ひたること」と強調されるように、光源氏がわざわざ下車の介添えをしている。^(注17) ここも「抱く」と明言されないものの、女三の宮をあたかも聖女と崇めるような光源氏の認識が作用している。最後の『栄花物語』の例も、体調不良の詮子を車に乗せる際に、寝ている暈もろとも車に乗せているものである。かなり異例なものと思われるが、それでも、一条天皇の母詮子という重さが、こうした対処をもたらしたのだと考えられる。

反対に、他者の手を借りることなく、自らの足で車に乗降せねばならない例を見ることで、これまで取り上げた諸例の意味するところがよりはっきりと見えてこよう。

寄せて下るべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門小さければ、さばかりえ入らねば、例の筵道敷きて下るるにいとにくく、腹立たしけれども、いかがはせむ。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひて見るもいとねたし。

（『枕草子』「大進生昌が家に」、三三三）

車の左右に大納言殿、三位中将二所して、簾うち上げ、下簾

引き上げて乗せたまふ。うち群れてだにあらば、すこし隠れ所もやあらむ、四人づつ書き立てにしたがひて、『それ、それ』と呼びたてて乗せたまふに、歩み出づる心地ぞ、まことにあさましう、顕証なりといふも世の常なり。御簾の内に、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見苦しと御覽せむばかり、さらにわびしき事なし。

（『枕草子』「関白殿、二月二十一日に、法興院の」、四〇六）
前者の例では、邸内の殿舎に車を「寄せて下るべきもの」だと思っていたものの、門が小さかったことで車を邸内に入れられずに下車してから歩かなければいけない作者が不快に思うところである。「筵道」が敷かれることは、地面に直接触れることを防ぐものだろうが、それでも「殿上人、地下なる」男たちの視線は免れることができない。また、後者の例では、作者清少納言が男たちや中宮定子の視線を意識しながら歩いて車に向かうが、「呼びたてて乗せたまふ」とあるように、その扱いは軽いものと言えるだろう。当然のことながら、清少納言は定子と引き比べて聖女ならざることで、どうやら歩いて車に乗り込まざるを得ないようだ。

自らの意志で、自らの歩みで乗り物に乗り、また下りること。その反対に、他者の手を介在することで乗り物に降りさせられることとは、厳然たる違いがあったのだという、ある意味当然のことをここでは確認しておきたい。

四、女を運び出す

さて、前節で確認したように、幼き者を抱いて車に乗降させる例は少なからず拾い上げることができる。一方で、成人女性を連れ出すことは、いわゆる嫁盗み譚という話型にしばしば指摘できるものであった。典型的な嫁盗み譚をあらためて確認しておこう。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに來けり。……これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、(『伊勢物語』六段、一一七) 大和の国なりける人のむすめ、いと清らにてありけるを、京より來たりける男のかいまみて見けるに、いとをかしげなりければ、盗みてかき抱きて馬にうちのせて逃げていにけり。

(『大和物語』百五十四段、三八八) その夜、勢多の橋のもとに、この宮を据ゑたてまつりて、勢多の橋を一間ばかりこほちて、それを飛び越えて、この宮をかき負ひたてまつりて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

(『更級日記』二八四)

『伊勢物語』芥川の段では、二条の后を男が背負つて盗み出すもので、また、『大和物語』竜田川の段は、「いと清らにてありける」

女を「かき抱きて」馬に乗せる例、『更級日記』の竹芝伝説では、帝の娘を男がやはり背負つて盗み出すものとなっている。盗み出すぐらいだから、圧倒的な美女と映ったのだろうが、それでも二条の后にあてられたり、皇女であつたりと、その圧倒的な身分差からくる崇めるような眼差し、いつてみれば聖女と思うからこそ盗み出す話となるのだろう。

折口信夫は「古風な婚礼」で嫁盗みにおける女の巫女性・聖女性を見ているが、相手の手を引くのも背中を押すのでもなく、抱きかかえたり背負つたりするかたちで行われることはどのように考えたらよいのだろうか。当然、社会的な規範を侵犯するからこそその嫁盗みなのであって、時には強引にことが進められてもおかしくはないが、それでも抱く、背負うといった所作の意味するところは考えておくべきだろう。

安井真奈美は背負うこと、おんぶする所作に聖なる者が対象となることがあるとし、奥三河の花祭りの事例などでも子どもが聖なる存在、神の子として背負われてくることを紹介しており納得させられる。^(注19) また、背負うことだけでなく、肩車の事例なども参看したいところだ。^(注20) 実見したもので忘れがたい肩車は、岡山県の牛窓町で行われる唐子踊りである。^(注21)

疫神社本殿前で幼児二人組による唐子踊りが奉納される秋季祭礼で、異国風の装束を纏った二人の幼児が、保存会の大人にそれぞれ

肩車されて境内の石段を上るところが実に印象深い。神前では肩車から下ろされ、いよいよ踊り子が一对で踊ることとなるが、その際も踊り子は地面に直接足を下ろすことなく敷かれた莫塵の上で奉納することとなる。その後、地区内を数カ所巡って同様に踊りが奉納されるが、いずれも踊り子を土に直接触れさせないような配慮がなされているようだ。

この民俗の起源説に神功皇后の伝説と結びつけるものがあるものの、牛窓は朝鮮通信使の寄港地であつたから、近世以降に根付いたものかもしれない。それでも、聖別された神の子に対する肩車という所作、そして、地面に直接触れさせることなく莫塵の上で踊りを奉納させるといった慣習は古代から続く觀念がなお息づいているといえるのではないだろうか。

したがって、神聖視された者に対するこうした意識や所作は、神の子のみならず、聖なる女をも抱きかかえて運び出す点にも結びついていたのではないかと考えたいが、どうだろう。

車に寄り来て、「御前は、とく船にたてまつりね」とて、かき抱きて、乗せ移すほど、心地、いかがはありけん。乳母、心ゆきげにして、物言ひ、笑がちになるを聞くに、ねたう悲しきこと、世の常ならず。

（『狭衣物語』巻一、一一—一三四）

「いざたまへ。宮の御使にて参り来つるぞ」とのたまふに、あらざりけりとあきれて、おそろしと思ひたれば、「あな心憂。

まろも同じ人ぞ」とて、かき抱きて出でたまへば、大夫、少納言など、「こはいかに」と聞こゆ。……「よし、後にも人は参りなむ」とて御車寄せさせたまへば、あさましう、いかさまにと思ひあへり。若君も、あやしと思して泣いたまふ。少納言、とどめきこえむ方なければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、みづからもよろしき衣着かへて乗りぬ。二条院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。

（『若紫』一一—二五四）

いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲がくれて、明けゆく空いとをかし。はしたなきほどにならぬさきにと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。

（『夕顔』一一—一五九）

掲げた三例はいずれも女を抱いて連れ出すところである。一例目は飛鳥井の女君を車から船に乗せ移すところであるが、女君をなかに拉致するがごとく連れ出すのだから、もつと暴力的に連れ出しても良さそうところだ。それでも、飛鳥井の女君に対する道成の意識が「かき抱きて、乗せ移す」行為へと繋がるのだろうか。二例目は、若紫を光源氏が連れ出す著名なところで、乗車する際も下車する際も光源氏が抱きかかえているところは、本論で問題とする浮舟に対

する匂宮の行為に通じるものがある。三番目の例は夕顔を光源氏が連れ出すところで、「軽らかにうち乗せ」とあるから、身体の小さな夕顔を抱きかかえて乗せたのだろう。あわせて、侍女である右近が自ら乗り込まなくてはいけないことが、むしろ抱きかかえられるものとそうでないとの差を雄弁に物語っているものと思われる。

五、聖女としての浮舟

いみじき天人の天降れるを見たらむやうに思ふも、……かくや姫を見つたりけん竹取の翁よりもめづらしき心地するに、いかなるもののひまに消え失せんとすらむと、静心なくぞ思しける。
〔手習〕六―二九九

われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに
〔手習〕六―三〇二

本論で問題とする浮舟、彼女はまさしく聖女として造型されているのであった。ここに掲げたように、明らかにそれと分かる表現を物語の中から容易に引き抜いてくることができる。そしてまた、かぐや姫になぞらえるからこそ、罪を贖う女君として、あるいは、さすらい、流離する女君として彼女は捉えられてきた。^(注22)果たして、聖女としての浮舟は異郷からもたらされたと言われるのであった。

先つころ来たりしこそ、あやしきまで昔人の御けはひに通ひた

りしかば、

〔「宿木」五一四五〇〕

さて、また、常陸になりて下りはべりにけるが、この年ごろ音にも聞こえたまはざりつるが、この春、上りて、かの宮には尋ね参りたりけるとなん、ほのかに聞きはべりし。

〔「宿木」五一四六〇〕

女車のこしごとしきさまにはあらぬ一つ、荒ましき東男の腰に物負へるあまた具して、下人も数多く頼もしげなるけしきにて、橋より今渡り来る見ゆ。
〔「宿木」六一四八七〕

初めの例に、「あやしきまで昔人の御けはひに通ひたりしかば」とある。そう、浮舟は不思議なくらい八の宮の長女大君に似ていた。手の届かない大君に似ていること、それが薫や匂宮の欲望を喚起し、男たちにとって神格化・聖女化されていく素地であった。ここを受けるかたちで二番目の用例では、浮舟が常陸と繋がりのある女君であったことが語られていく。「東路の道の果てなる常陸」^(注23)こそ、異郷の地として最もわかりやすいものであろう。^(注24)三番目の例、『源氏物語』で橋を渡る女は彼女に限られるが、橋という境界を渡ること

も浮舟が異郷の女であることを指し示しそう。
決して手に入れることができなかった大君、彼女を思い続ける薫にとつて、その妹浮舟の存在を知った時の心のときめきはいかほどのものであったか。そして、ついに薫が浮舟を垣間見る瞬間が訪れることとなる。

若き人のある、まづ下りて、簾うちあぐめり。御前のさまよりは、このおもと馴れてめやすし。また、おとなびたる人いまい人下りて、「はやう」と言ふに、「あやしくあらはなる、心地こそすれ」と言ふ声、ほのかなれどあてやかに聞こゆ。「例の御事。こなたは、さきさきもおろしこめてのみこそははべれ。さては、また、いづこのあらはなるべきぞ」と、心をやりて言ふ。つつましげに下るるを見れば、まづ、頭つき様体細やかにあてなるほどは、いとよくもの思ひ出でられぬべし。扇をつとさし隠したれば、顔は見えぬほど心もなくて、胸うちつぶれつつ見たまふ。車は高く、下るる所はくだりたるを、この人々はやすらかに下りなしつれど、いと苦しげにややみて、ひさしく下りてゐざり入る。

〔宿木〕五―四八九

「宿木」巻から少々長く引用したが、ここでは車から若い女房、年配の女房と下りてくる。その年配の女房から「はやう」と促されるも、男の視線を意識する浮舟は、意識した通り男の視界に収まっているのであつた。舐めるように詳細に垣間見されるすがたが描写されているが、その容姿が大君に通じていることは薫の心をざわつかせたことであろう。難渋しながらも彼女が自らの足で車から下りてくるところまで見入られてしまうのである。

ここから本格的に薫そして匂宮を介した浮舟物語が始動するわけであるが、その後の浮舟も、いまだ安住の地を得ることなく、さす

らしい女君と呼ぶにふさわしく、各地を移動していくこととなる。しかし、そこに薫や匂宮が介在することで、自らの足で立つことは制限されていくようだ。三条の小家から宇治へと移動する「東屋」巻のところを掲げてみよう。

おのおの入りて臥しなどするを聞きたまひて、人召して、車、妻戸に寄せさせたまふ。かき抱きて乗せたまひつ。誰も誰も、あやしう、あへなきことを思ひ騒ぎて、「九月にもありけるを。心憂のわざや。いかにしつることぞ」と嘆けば、尼君もいといとほしく、……この君に添ひたる侍従と乗りぬ。……君ぞ、いとあさましきにものおぼえて、うつぶし臥したるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて、抱きたまへり。

〔東屋〕六―九三

この場面では薫が浮舟を「かき抱き」て車に乗せているが、すでに指摘がなされているように、ここは匂宮が浮舟を連れ出すところと相通じるものがある。浮舟のみならず弁の尼と侍従も同乗するが、もちろん彼女らは抱きかかえられて乗ることはない。女であっても、その対象を特別視する者に限定されるからだと考えられよう。

有無を言わず連れ出すだけであれば、手を引くなど他の手段であつてもよいわけである。女の考えを無視して暴力的に連れ出すというのなら、必ずしも「抱く」行為を伴わなくてもよいはずである。対照的な事例と付き合わせることで、それは確かめてみるこ

が可能だ。『和泉式部日記』の例を以下に掲げよう。

「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。心のどかにものなども聞こえむ」とて車をさし寄せて、ただ乗せに乘せたまへば、われにもあらで乗りぬ。人もこそ聞けと思ふ思ふ行けば、いたう夜ふけにければ、知る人もなし。やをら人もなき廊にさし寄せて、下りさせたまひぬ。月もいと明ければ「下りね」としひてのたまへば、あさましきやうにて下りぬ。

〔和泉式部日記〕三三二

帥宮が和泉式部を連れ出すところである。「ただ乗せに乘せたまへば」と強引に連れ出そうとしており、「われにもあらで」と和泉式部が茫然自失となったなか、浮舟のように抱かれることなく車に乗り込むこととなる。下車する際も帥宮は「下りね」と強く指示を出し、「あさましきやうにて下り」るほかない和泉式部であった。おそらく、暴力的に連れ出すというのは、こうした事例を言うのではないだろうか。帥宮における和泉式部の位置というものがよく分かるし、それは聖女のように崇める視線ではなかったのだろう。時に召人的なものとして和泉式部は考えられているが、そうしたある意味見下す眼差しが、「抱く」ことなく連れ出す表現となっているようである。

これまでも「抱く」ことの意義が注目されてきたが、かつて論じたことがあるように、その行為は「支配／被支配」といった構図に

とどまらず、「抱く」ことの古代的意義・民俗学的意義を無視しない方が^(注2)良いだろう。対象を「抱く」こと、それは愛情によってなされる、などといった近代的な発想だけで捉えることはできない。抱くことで対象を庇護する、加護する呪術的意義を抜きに考えることはできないのではなかったか。

浮舟を抱いて連れ出し、抱きながら舟で移動し、そして抱きながら下船する。この一連の行為は、「いと見苦しく、何人をかくもて騒ぎたまふらむ」と周囲から怪訝な目で見られるほどであった。まさしくそれは、有無を言わず連れ出すための方策ではなく、むしろ浮舟を加護するがごとく丁重に扱い、聖女として崇め立てるほどの、男たちによる浮舟に対する思いの強さを語るものであった。

〈注〉

- (1) 『源氏物語』およびその他の引用は小学館新編日本古典文学全集により、私に傍線・頁数等を付した。新編全集によらないものは各々明記した。
- (2) 新編全集頭注。
- (3) 『源氏物語注釈』（第十一巻、風間書房、二〇一八年）は、「匂宮は浮舟には何の説明もなく、従って浮舟の同意も得ていない。むしろ、浮舟は躊躇して動かないので、匂宮は一方的に、まるで人形を抱くようにして、事を運んだようである」とする。
- (4) 橋本ゆかり「抗う浮舟物語―抱かれ、臥すしぐさと身体から」（『源氏物語の〈記憶〉』翰林書房、二〇〇八年）。
- (5) 玉上琢彌『源氏物語評釈』（第十二巻、角川書店、一九六八年）は、

以下のような鑑賞を示している。

- 女が車に乗るとき降りるとき、男が抱くのである。舟も同じだ。舟の中ですでに、「心細くおぼえて、つとづきていだかれたる」女である。匂宮自身が抱く。そしてその匂宮が、女を抱いたまま人に助けられて、家にはいるのである。それを、非難の目で見る供人。宮さまともある方が。いなかに住む女を、なにかまでもあられまいに、と思うのだ。当時の移動については藤行も問題となるが、その点については、針本正行『源氏物語』の表現―「あざる」を中心として―（『伝統と創造の人文科学』国学院大学大学院、二〇〇二年）参照。
- 土や泥の類は生命・万物の源ともなることから呪力・靈力が認められよう。こうした觀念こそが土に触れることを忌み嫌う心性に繋がるわけで、神聖視されることとタブー視されることは両義的である。この点については、石上堅「土」（『日本民俗語大辞典』桜楓社、一九八三年）、内田幸彦「泥の呪力―埼玉県内の民俗行事から―」（『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要』二〇一八年三月）等参照。
- 「走る」ことについては、馬場光子「走る女」（『走る女 歌謡の中世から』筑摩書房、一九九二年）、稲田利徳「人が走るとき―王朝文学と中世文学の一面―」（『人が走るとき 古典のなかの日本人と言葉』笠間書院、二〇一〇年）参照。
- 原岡文子「紫の上の登場―少女の身体を担って―」（『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年）。
- 林悠子「平安貴族女性が歩くとき」（『瞿麦』二〇一六年三月）。
- 岡崎知子「平安朝女性の物語」（『平安朝女流作家の研究』法蔵館、一九六七年）、三浦則子「平安文学における移動を巡る物語と物語絵」（『語学・文学研究の現在Ⅰ』弘学社、二〇一一年）。
- ちなみにかつて筆者も、天理から山の辺の道を経由して初瀬まで歩いたことがあるが、脚の疲労がひどくなり、あわせて熱中症でダウンしたこともあって、最後は結局タクシーの力を借りる体たらくだった。夏場などに初瀬詣を真似る方が悪いのだが。
- 服藤早苗「平安王朝の五節舞姫・童女 天皇と大嘗祭・新嘗祭」（『塙書房』、二〇一五）。
- 松本政春「貴族官人の騎馬と乗車」（『奈良時代軍事制度の研究』塙書房、二〇〇三年）、橋本義則「古代御輿考―天皇・太上天皇・皇后の御輿―」（『古代・中世の政治と文化』思文閣、一九九四年）、京樂真帆子『牛車で行こう！平安貴族と乗り物文化』（吉川弘文館、二〇一七年）、古谷紋子『日本古代の身分秩序と馬・牛車』（塙書房、二〇二四年）等。
- 注（7）参照。なお、竹内正彦「ぬき足の光源氏―王朝びとの足音をめぐって―」（『むらさき』二〇二二年二月）は、「ぬき足」の語に注目し、それが地上に足をつけぬように歩むことであるととし、足音が魂を顕現させるものであったとすれば、それを消して歩むことは存在を地上ならぬものとするのだという、興味深い見解を示す。
- この問題については、津島昭宏「ふたりの母―撫つ―明石の君と」『もてあそぶ』紫の上」（『古代中世文学論考』第十七集、新典社、二〇〇六年）で論じたことがある。
- 諸注が参照するように、『河海抄』の「臣下の礼は妻を迎時は身つから車を寄る礼也云々 院中の義には此儀あるへからざる歟然而六条院た、人のことくふるまひて卑下し給よし歟」（『紫明抄・河海抄』角川書店、一九六八年）とする注が注目されよう。
- 折口信夫「古風な婚礼」（『折口信夫全集』第十七巻、中央公論社、一九九六年）。近年のものでは、立石和弘『男が女を盗む話』（中央公論社、二〇〇八年）が参考となる。
- 安井真奈美「おんぶと抱っこの変容―身体技法に関する人類学的研究

にむけて』『怪異と身体の民俗学―異界から出産と子育てを問い直す』せりか書房、二〇一四年）。

(20) 山路興造「肩車」(『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、一九九九年)。

(21) 糟谷政和「牛窓(岡山県瀬戸内市)の唐子踊りと朝鮮通信使」(『茨城大学人文学部紀要 人文コミュニケーション学科学論集』二〇一三年三月) 参照。

(22) この点については、林田孝和「贖罪の女君―源氏物語における浮舟物語の位置―」(『林田孝和著作集』第一巻、武蔵野書院、二〇二一年)、長谷川政春「さすらいの女君(二)―浮舟」(『物語史の風景』若草書房、一九九七年)、小林正明「最後の浮舟―手習巻のテキスト相互関連性―」(『物語研究―特集・語りそして引用』新時代社、一九八六年)、小嶋菜温子「浮舟と〈女の罪〉―ジェンダーの解体」(『源氏物語批評』有精堂、一九九五年)、スエナガエウニセ「小野の浮舟とかぐや姫―「あはれ」・母恋・老い・女の身」・言葉の獲得―」(『物語研究』二〇一五年三月) 等が挙げられる。

(23) 『古今和歌六帖』下巻(第五帖・帯・三三六〇、和歌文学大系)。

(24) 高崎正秀「説話物語序説―その淵藪としての宇治の世界への詩論―」(高崎正秀著作集第六巻『源氏物語論』桜楓社、一九七一年)。

(25) 原岡文子「境界の女君―浮舟―」(『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年)

(26) 葛綿正一「交通・移動・運搬―物語とテキスト―」(『物語とメディア』有精堂、一九九三年)、相馬知奈「浮舟物語の水脈と交通―浮舟に働く二つの張力―」(『フェリス女学院大学 日文学大学院紀要』二〇〇三年三月) 参照。

(27) 岡田ひろみ「抱く」(『王朝物語のしぐさ』ことば『清文堂、二〇〇八年)、富澤萌未「子どもを「抱く」「膝に据う」」(『うつほ物語 子ども流離

譚』翰林書房、二〇二一年)、春日美穂「敦成親王を抱く一条天皇―『紫式部日記』寛弘五年土御門殿行幸の記述から―」(『源氏物語の皇統譜』新典社、二〇二四年) 等参照。

(28) 津島昭宏「抱かれる明石の姫君―『源氏物語』の親と子を考える―」(『横浜英和学院教育』二〇〇八年三月)、津島昭宏「戸にいる翁、抱く姫―『竹取物語』の親と子を考える―」(『横浜英和学院教育』二〇〇九年三月)。

〔付記〕 本稿は令和五年度國學院大學国文学会春季大会で口頭発表したものを礎としている。